

静岡文化芸術大・船戸ゼミ 住民意識調査

静岡文化芸術大(浜松市中区)文化政策学部の船戸修一教授とゼミ生5人が27日、同市北区引佐町久留女木地区の会合に参加し、同地区を対象に行った棚田や地域の未来に関する意識調査の結果を報告した。実家を離れた家族が一定の頻度で帰省しているデータを挙げ、地域コミュニティを維持する上で「地区外に住む子どもらを自治会活動や地域運営に巻き込むことが大切」と指摘した。

「実家離れても一定頻度帰省」

活動に巻き込む大切さ 指摘

ゼミは2016年から、学生を中心に「久留女木の棚田」で米の栽培、販売に取り組んできた。19年に棚田地域振興法が施行され、棚田を核とした地域活性化が求められる中、耕作に関する住民が少ない現状を知り、調査を企画した。

全58世帯を対象にアンケートを行い、50世帯約130人から回答を得た。「棚田を残したいか」という設問は、約9割が全部、または一部を残したいと回答。「代々継承されてきた農地だから」「美しい景観だから」などと理由を挙げた。

調査結果を地域住民に報告する船戸教授(左)＝浜松市北区引佐町



調査では、地区外に出た子どもの7割が県西部や愛知県三河地方など近隣に住み、年11回以上帰省する人が多いことも明らかになった。船戸教授は「血縁関係はいざという時に助けになる。地区外の家族ら複数人が自治会活動に参加できる仕組み作りが重要」と話し、棚田を活用した活動などで協力していく意向を示した。

ゼミは今後、集落や年代ごとに結果をまとめた報告書を作成し、全世帯に配布するという。

(細江支局・大石真聖)

久留女木棚田保存 「地区外の子も」